最優秀賞

今の自分の心とからだの障がい

妙円寺小学校　六年　今村　乃愛

「明日学校に行きたくないな。」
担任の柴山先生が、
「明日の総合の時間は、体育館で障がいや福祉のことについて、所﨑先生に教えていただきます。」
と言われたときわたしはそう思った。
　わたしは、両足に補装具をつけている。産まれた時から何度も手術を受け、自分が歩行するためには必要な道具だ。周りの友達やほかの学年の子たちもわたしのことを知っていてくれるので、今まで嫌な気持ちになることはなかった。しかし、わたしが六年生になり一年生の教室に手伝いに行くようになって、何か心に引っかかるものがでてきた。
　一年生とはすぐに仲良くなり、手伝いをしたり、お世話をしたりすることをとても楽しく感じていた。でも、一年生の中でわたしの足につけている補装具に気付いた子たちが次々に質問してきた。
「足に何つけているの。」
「それ、何。」
一人から始まった質問は、なかなかとまらない。わたしは何と答えていいかわからず笑ってごまかすしかなかった。先生に相談すると、
「自分の足を守るための大事な道具だよって言えばいいんじゃない。」
と言われ、自分なりの答えをもてたが、一年生教室に行くことをさけるようになった。
　六年生みんなを集めて体育館で行われた所﨑先生の話は何だか、集中して聞くことができなかった。自分のことを言われている気がして、とても嫌だったし、話が終わった後にみんながわたしのことをどのように思っているのかということがとても気になった。
　総合の時間は、障がいや福祉に関係することを自分たちで調べていくことになった。何だか、自分のことを調べているような気がしてあまり気持ちがのらなかった。どんなことについて調べるかいろいろと悩んだあげく、体に障がいをもつ人たちの介助をする動物たちについて調べることにした。目が不自由な人たちと一緒に行動する

盲導犬、体の不自由な人たちの介助をする介助犬など、体の不自由な人たちの介助などをする動物がたくさんいることを知った。そして、何よりも感動したのが、介助する動物と介助をしてもらう人間との間にしっかりとした信頼関係が築けているということだ。命を預ける人、命を預かる動物。ものすごい関係だと思った。

　今までのわたしは、人からどう見られているのかということがとても気になっていた。補装具をつけていることで、みんなはどんな風に見ているのか。行動が遅くなってしまうことをどう思っているか。これから中学生になり、他の小学校からきた人たちにまた補装具のことを聞かれるかもしれないけれど、いろいろな人と信頼関係を少しずつ築き、どんなこともものりこえていきたいと思う。